

## IAUD Newsletter vol.10 第5号(2017年8月号)

1. 「2017年度第1回定例セミナー(IAUDアワード説明会)」開催報告	1
2. 余暇のUDPJ 余暇のUDPJ「シネマ・チュプキ・タバタ」訪問報告	5
3. グローバルインタビュー2016②	8
4. 「IAUD住宅学生コンペ」開催のご案内	15
5. 「第16回UD検定初級」「第10回UD検定中級」開催のご案内	15
6. IAUD8月の予定	16



## 多くの方が快適で暮らしやすいUD社会の実現へ

### 2017年度第1回定例セミナー(IAUDアワード説明会)開催報告

「IAUDアワード2017」を今年も実施するに伴い、審査体制や応募詳細について説明する「2017年度第1回定例セミナー(IAUDアワード説明会)」が、7月10日(月)にサンケイプラザ(東京・大手町)で開催され、アワード応募に関心のある方やIAUD会員、メディア関係者など39名が参加しました。

当日は総裁の瑤子女王殿下にご臨席賜る中、IAUDアワード審査委員から審査体制の説明や、過去のアワード大賞・金賞受賞者によるプレゼンテーションが行われました。

また、金庭宣雄名古屋市議員による「UD2016開催報告」や、「2017年度第1回定例セミナー」として、経済産業省 藤原宗久良氏の講演「成長戦略とデザイン政策」も行われ、大変内容のある充実したものとなりました。

今号のNewsletterでは、開催の概要報告をお伝えします。



「2017年度第1回定例セミナー(IAUDアワード説明会)」会場の様子

### ■UD2016開催報告

2016年12月に開催された「第6回国際ユニヴァーサルデザイン会議2016 in 名古屋」の開催報告が、共催の名古屋市を代表して名古屋市議員の金庭宣雄氏よりありました。

金庭議員は、「自治体や地元企業、大学が賛同して開催に取り組み、約30か国から1万2000人にご参加いただき、UDに関して有意義な議論や相互交流が活発に行われた。

名古屋市はこの国際会議を契機に、誰もが暮らしやすい社会の実現をめざすUDを取り入れた街づくりめざすとともに、更なるUDの普及が推進されるよう取り組んでいく。そして、『UDが当たり前の町、それが名古屋です』と、市民の誰もが言える名古屋を目指します」と述べました。



金庭議員

## ■IAUD アワード説明会

IAUD アワード 2017 審査委員会の益田文和副委員長、荒井利春審査委員、川原啓嗣審査委員より、IAUD アワードの取り組みや審査体制について説明がありました。

まずは、「IAUD アワード 2017」の開催概要と審査体制のポイントや審査会の具体的な様子、さらに過去 6 回の実施報告があったほか、応募を検討している参加者からの質疑応答も行いました。

益田副委員長は「デザインのベースにある文化の多様性と身体の機能の普遍性、両方を備えているか審査している。応募者には、どこまで深く掘り下げて自信を持って提言できているか、考えてほしい」と述べました。

また、荒井審査委員は、「何を根拠に UD の提案をしているのか、を重視している。その根拠を抱き合わせて、わかりやすく提案してほしい」としました。



益田副委員長(写真左)と荒井審査委員

その後、過去のアワード受賞者 5 組によるプレゼンテーションが行われ、応募に至る経緯や受賞した取り組みの紹介、受賞後の反響等の発表がありました。

受賞者からは、「受賞をきっかけに対外的なアピールができた」「社内での意識変化があり、スタッフのやる気につながった」「商品の大きな自信になった」「受賞の名誉に恥じないよう、UD の普及に貢献していきたい」などのお話がありました。



アワード受賞者のプレゼンテーション

### 【過去の受賞者 5 件のプレゼンテーション】

それぞれの受賞取り組みの内容は、過去の Newsletter をご覧ください。

・2016 年大賞 「Fujitsu GUI Next Plus (FGNP) 誰もが公平にソフトウェアを使える社会に向けた新しい GUI デザイン基盤」 富士通株式会社

発表者: 富士通デザイン株式会社 久野大光氏

<https://www.iaud.net/newsletter/8478/>

・2014 年大賞 「UD 視点による現場作業性改善」 三菱電機株式会社

発表者: 三菱電機株式会社 吉田俊哉氏

<https://www.iaud.net/newsletter/2570/>

・2015 年大賞 「西葛西・井上眼科病院における人間の感覚に基づいた安全・安心の新たなユニバーサルデザインの取り組みと実践」 医療法人社団済安堂／鹿島建設株式会社

発表者: 井上眼科病院 荒井桂子氏

<https://www.iaud.net/newsletter/2582/>

・2016 年金賞 『音のユニバーサルデザイン化支援システム「おもてなしガイド」』 ヤマハ株式会社

発表者: ヤマハ株式会社 岩瀬裕之氏

<https://www.iaud.net/newsletter/8696/>

・2014 年金賞「みんなの使いやすさラボ(略称 みんなラボ:高齢者による使いやすさ検証センター)」筑波大学

発表者:筑波大学 原田悦子氏

<https://www.iaud.net/newsletter/2570/>

※「IAUD アワード 2017」の第 1 次審査応募締め切りは 9 月 15 日(金)まで延長されました。皆様の応募をお待ちしております。詳細はこちらをご覧ください。

<https://www.iaud.net/award/8600/>

## ■第 1 回定例セミナー

経済産業省商務・サービスグループ クールジャパン政策課課長補佐 デザイン政策室室長補佐の藤原宗久良氏による講演「成長戦略とデザイン政策」が行われ、政府が取り組んでいるデザイン政策などについて、非常に貴重で有意義なお話がありました。以下に講演概要を掲載します。



藤原氏

### 日本の魅力を海外展開

政府は日本各地の魅力的な地域資源を海外市場に展開し、地域再生につなげるプロジェクトを「ローカルクールジャパン」として取り組んでいます。

その中でデザインを活用した事例に、「MORETHAN」プロジェクトがあります。これは、日本の生活文化の特色を活かした魅力ある商材を生産する中小企業に、市場調査や PR、流通まで一貫してプロデュースする人材の費用やネットワークを支援し、海外販路拡大を促進するものです。3 年間で 20 都道府県で実施し、地域資源の発掘と海外展開に貢献しました。

### 「第 4 次産業革命」を迎えて

現在、「第 4 次産業革命」という新しい時代を迎えています。

これは、従来の改良型イノベーションではなく、技術ブレイクスルーによる破壊型イノベーションです。

大量の情報をもとにした人工知能やビッグデータなどにより、これまで実現不可能とされていた社会の実現が可能になり、現在の市場を一変させるような、産業・就業構造が劇的に変わるビジネスが生み出される時代となっています。



熱心に講演に聞き入る参加者

デザインに対する期待は大きく、これからのデザイナーには、幅広い業務を手掛け、企画力・社会課題解決力があり、世の中の流れを俯瞰し、未来を想像できる人材が求められています。

### なぜ今、デザインなのか

現代社会では「物質的な豊かさ」はすでに飽和しつつあり、人々は「心の豊かさ」を求める時代になっています。これまでの技術中心の製品開発が通用しなくなってきており、ユーザーが真に欲する生活や感性は何か、という観点でのものづくりの重要性が向上しています

また、「デザイン」の意義も、ユーザーニーズを的確に捉えてコンセプトを設計し、最適な製品・サービスを生み出すための活動、と捉え直されてきています。

そのため、デザイナーが担当する領域もプロダクト設計やユーザー体験全体、製品コンセプトなどへと拡大しています。

さらに、客観・論理・計画といった従来のアプローチとは異なり、人を徹底的に観察・共感して生まれる主観的な課題をもとに、発想を次々と実験しながら解決策を具現化していく「デザイン思考」のアプローチが注目されています。

諸外国では、デザイン・技術・経営を三位一体として教育する高等教育機関が増加しており、卒業生は複数分野を横断し、イノベーション創出や新規サービス開発に関わっています。

日本でも、世界最高水準のデザインスクールの設立や国内外の研究プロジェクト・教育プログラム・教育機関との連携による領域横断型人材育成のためのシステム形成が重要視されています。

## 企業への啓蒙活動

2016年11月に経済産業省主催で「第4次産業革命 クリエイティブ研究会」を発足し、企業成長性の相関や人材像と育成方法、企業組織のあり方について研究しました。

その結果、企業のデザインの役割への期待は強く、幅広い領域で活用できると認識しており、デザインを広く捉えているほど営業利益は増加傾向とわかりました。

クリエイティブを活用するためには、ビジネスモデル構築の上流から多様な職域を持った人材を配置したり、プロダクト・サービスを開発プロセスに顧客を巻き込む、プロジェクトの初期段階からデザイナーを入れる、と議論がなされました。

さらに、デザインに理解のある人材を経営層に配置したり、外部クリエイティブファームの活用など、高度人材育成機関と連携したクリエイティブの活用する組織設計が不可欠だとわかりました。

## デザインを通じ、豊かな社会へ

これからはユーザーの本質的に求める価値を探り、最適な商品・サービス化に向け徹底的に洗練されたプロセスで開発することが重要となります。

従来からのデザインと捉えられていた領域を超えた高度デザイン人材を創出すること、また企業経営においてもデザインの重要性の理解促進、デザイン人材を活用できる企業体制の構築が不可欠であると考えられます。

これは都心部の大企業のみならず地方都市や中小企業にあっても同様に企業活動の上で重要な取り組みとなります。

今後は高度デザイン人材育成の取り組みを推進するとともに、これらの人材が企業で活躍するためにより横断的・広範囲なデザイン活用の啓蒙が必要となります。

## ■ 瑠子女王殿下からのお言葉

最後に、総裁の瑠子女王殿下からお言葉を頂戴しました。

瑠子女王殿下は、「父(前総裁 寛仁親王殿下)は、『100%の障害者はいない。100%の健常者もない』と考えていた。障害がある人、障害のない人、といった垣根を越えたボーダーレスなものと考えていただくことが一番必要。



総裁の瑠子女王殿下

IAUD アワードには、自分の熱意や信念を形にした方はどなたでも応募してほしい。昨年のアワード審査会に参加したが、非常に白熱した議論がなされている。皆様の信念をぜひ、IAUD にぶつけていただきたい」と述べられました。

※「第1回定例セミナー(IAUD アワード説明会)」の記事が産経新聞の紙面と産経ニュースのWEB版(経済/産業・ビジネス)に掲載されました。

<https://www.iaud.net/activity/9026/>

## 誰でも安心して映画を楽しめる日本発のUD映画館

### 活動報告:余暇のUDPJ「シネマ・チュプキ・タバタ」訪問

「テレビCMにも字幕を」をテーマに活動している余暇のUDプロジェクトは、6月27日(火)に日本初のユニヴァーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」(東京・田端)を訪問しました。

当日は同PJのメンバー6人で映画を鑑賞後、同館代表者に設立経緯や施設についてお話を伺いました。

今号のNewsletterでは同館訪問の様子を同PJの土屋亮介氏が報告します。



シネマ・チュプキ・タバタ入口

### さまざまな人に配慮した内部施設

「シネマ・チュプキ・タバタ」は、目や耳の不自由な人、車椅子利用者、発達障害のお子さんや小さなお子様連れのママたちなど、だれもがいつでも安心して、一緒に映画を楽しむことのできる日本初のユニヴァーサルシアターとして、2016年9月1日にオープンした小さな映画館です。

同館内部はさまざまな人が映画を楽しめるよう、細部まで工夫や配慮が行き届いています。

シートは2人×3列+3人×3列で通常は15人掛け、補助席を含めると最大25席と、コンパクトなミニシアターです。

車椅子スペースを3席設けており、入口からトイレ、客席までバリアフリーで、車いすのまま映画を鑑賞できます。

後部には、親子で使える個室鑑賞スペースも確保してあります。個室鑑賞スペースは完全防音構造で、スクリーンの見える窓と、映画の音が流れるスピーカーを設置しており、多少子供が騒いでも親子で安心して映画を見ることができます。

また、日本映画も含め常時日本語字幕付き上映を行っており、聴覚障害者も一緒に映画を楽しめます。

各シートにはヘッドホン差し込むイヤホンジャックが備わっており、視覚障害者が言葉による映像解説の「音声ガイド」を聞くことができます。さらに、映画本編の音声も増幅することが可能なため、難聴の方も利用することができます。

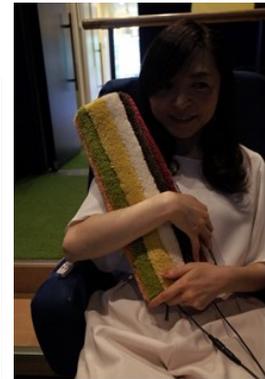
さらに、希望すれば抱いて使う「抱っこスピーカー」も使うことができ、聴覚障害者が効果音や音楽のリズムなどを体で感じるすることができます。



個室鑑賞スペース



イヤホンジャック

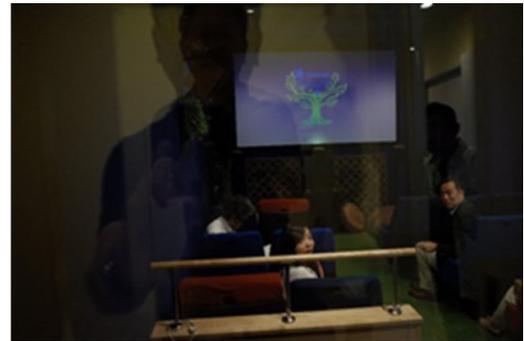


抱っこスピーカー

## UD 映画館を実際に体験

今回鑑賞した映画は、2013年のポーランド映画で、実話に基づいたストーリー「幸せのありか」です。

1980年代の民主化に揺れるポーランドを舞台に、脳性まひの青年が、肢体不自由であるがために、コミュニケーションが取れないレベルの脳障害があると思われてきたが、瞬きで文字を伝達する手法によってまわりの人たちと徐々に交流を深めていく、というものです。



映画館内部の様子

2013年にモントリオール世界映画祭でグランプリを受賞した映画だけに、ストーリー展開や演技は迫真で、映画のUDチェックをするつもりが、思わず映画の中身に引き込まれてしまいました。

字幕は「バリアフリー字幕」といって、洋画についている字幕とはちがいで、音楽や効果音の説明、話者表記なども分かりやすく作られた字幕でした。

例えば、唸り声をあげるシーンでは、通常は字幕が入らない、もしくは「唸り声」と簡単に表示されますが、バリアフリー字幕では、「大きな声で唸り声を上げる」と聞こえなくても分かりやすい表示となっています。

また、イヤホンジャックにヘッドホンを繋いで音声ガイドも聞いてみました。解説は的確で、過不足ない情報を得られる感じがしました。

さらに、映画を見ていて音質が非常に良く調整されていると感じました。後で聞いてみると、音響メーカーのエンジニアが細かく調整したものとのことでした。

障害者だけでなく、健常者も心地よく鑑賞できるように作られており、まさにUDの作りになっていると感じました。

## どんな人も安心して映画を楽しめるために

映画鑑賞後、メンバーは同館代表の平塚千穂子氏に設立経緯や設備などについてお話を伺いました。

以下、要点を箇条書きで記載します。

### 【「シネマ・チュプキ・タバタ」設立の背景、運営】

・同館は「City Lights」というバリアフリー映画鑑賞推進団体が2016年9月に第一号としてオープンしたものです。

・設立にあたり、1880 万円をネットや SNS、クラウドファンディングにて支援を受けた。同館入口の天井には、支援者の名前が記載されている。

・主な収入源は入場料金、講習会（音声ガイド・ナレーション等）、同館への寄付で賄っているが運営は大変とのこと。同館のある北区からは一切補助が出ていない。

・少人数で同館の運営を行っている。

・上映する映画は、候補作からスタッフが実際に視聴した上で、自閉症、子育て、教育などテーマごとに同館にマッチしたものを選択している。なかなか良い映画を見つけるのは大変とのこと。



平塚氏(写真右)にインタビュー

### 【字幕付与】

・外国映画は基本字幕がついているのでそのまま上映する。

・日本映画など字幕のないものについては、同館の方で独自に字幕を作る場合もある。作る場合は「MASC」という専門会社へ依頼している。

・DVD 化される映画は、日本映画でも必ず字幕がついているが、最近は DVD 化しないドキュメンタリー映像が多く、字幕がついていない。これは DVD 化されると映画館に足を運んでももらえない、という事情から来ている。（だからと言って字幕がいない、という発想は・・・）

・ドキュメンタリー映画のインタビュー場面などでは、人によって聞き取り辛いしゃべり方をする人もいるので、このようなシーンでは健常者にとっても字幕は有益。

・視覚障害者用の音声ガイドは同館で制作している。

### 【設備】

・プロ用のプロジェクターは高額なので、民生品の 4K プロジェクターを使っている。画質は全く問題ないレベルであった。

・オーディオは「フォレストサウンド」と呼んでおり、DENON や JVC のエンジニアがきて調整したもの。劇場の前面、側面、後面、天井までスピーカーを配置し、作品に最適な立体的な音場を創造している。おそらく森の木々に包まれたような音質を目指してのネーミングなのでは、と推察した。実際、非常に高音質であった。

### 【観客】

・2016 年 9 月の開館以来、約 1 万人が来場。健常者が多く、次に視覚障害者が多い。精神障害者も来場しているが、車椅子利用者と聴覚障害者は少ない。聴覚障害者は視覚障害者に比べて 1/10 程度。

まだ知名度が低いのでは、と思っているので、もっとアピールしていきたい。

・同館では特別な障害者割引は行っていない。しかし、介助が必要な方には介助者を無料にしたり、障害のため就業につけず収入面で苦しい人には自己申告で「プアエイド割引」を適用できる。

## 【課題や今後の展望】

・字幕や音声ガイドを作る際に、字幕は視覚障害者に協力してもらい、音声ガイドは聴覚障害者に協力してもらってはどうかと考えている。

一見逆に感じるが、視覚障害者は映画を見る際にセリフや環境音など、限られた情報から最大限に映画の内容を理解しようとしている。この情報が聴覚障害者へテキスト情報として伝われば、きっと良い字幕ができるであろうとの発想だ。

同じように、聴覚障害者が必要とする音声情報を視覚障害者に伝えられればきっと良い音声ガイドができるはず、と考えており、私たちは近いうちにこの取り組みを実現したいと思っている。

・同館は点字図書館として、録音図書ダウンロードできる取り組みを行っている。これはシネマデイジー(映画コンテンツ)として、なかなか映画館へ足を運べない地方の視覚障害者に人気がある。

1つの作品が2時間程度で鑑賞できる。最近ではアニメ映画「アナと雪の女王」が2000ダウンロードされた。映画の著作権規制が緩くなったので、音声ガイドMIXが付けやすくなったとのこと。

・映画館として、ショートフィルム製作者の応援や音声ガイドのワークショップ支援を予定している。

コンペをやって1位作品には賞金を出すことも考えている。また、海外出品も視野にしている。

## すべての映画館がユニヴァーサルに

今回はユニヴァーサルシアターという映画館を実際に体験する、と言う点で非常に貴重な体験となりました。

このシネマ・チュプキ・タバタのような取り組みの映画館が身近にあれば、映画を楽しめる人口がもっと増えると思われます。

第一号のこの映画館をきっかけとし、すべての映画館がユニヴァーサルになっていくことを期待します。

(了)



代表の平塚氏(写真左)と支配人の佐藤浩章氏

※「シネマ・チュプキ・タバタ」の詳細は以下をご覧ください。

<http://chupki.jp/>



2020年までの日本のUDに期待すること  
グローバルインタビュー2016②

IAUD 情報交流センターは、2016年12月に名古屋国際会議場(愛知・名古屋市)で開催された「第6回国際UD会議 2016in名古屋」において、海外からご参加いただいた有識者5名にグローバルインタビューを実施しました。

インタビューでは、日本や国際会議の開催地である名古屋のUDの印象や2020年の東京オリンピック・パラリンピックのUDに向けて必要に思うことを、有識者の方々の国やビジネスと比較しながら答えていただきました。

今号の Newsletter では、グローバルインタビュー2016②として、トーマス・バーデ氏(ユニヴァーサルデザイン研究所 CEO:ドイツ)、パドミニ・トラット・バララム氏(ヴィスバ・バラティ大学デザイン教授:インド)、シンガナパリ・バララム氏(DJ デザインアカデミー学長:インド)へのインタビューを掲載します。(インタビュアー:情報交流センター所長 北村和明)

※グローバルインタビュー2016①は IAUD Newsletter vol.10 第 4 号をご覧ください。

<https://www.iaud.net/activity/newsletter/>

※これまで実施したグローバルインタビューはこちらをご覧ください。

<https://www.iaud.net/network/>

## ヨーロッパに UD 戦略をもっと提示してほしい

トーマス・バーデ (ドイツ:ユニヴァーサルデザイン研究所 CEO)



トーマス・バーデ氏

—日本にいらっやって、日本の印象はどうか。

日本には 4 回来ています。日本は、UD に関してはリーダーシップをとっている、と考えています。特に、「第 6 回国際 UD 会議 2016in 名古屋」に参加(セッション 2「観光の UD2 ~ 名古屋を観光都市にする方策」で講演)して思ったのは、UD がこれまでの製品のデザインという所から、もっと全体的なプロセスへと進化させ、他の国よりも一歩先をいった観点で UD を論じている、と感じています。

—「IAUD アワード 2016」の審査員だけでなく、ドイツでも UD のデザイン賞で長く携わってきていらっやいますが、ドイツと比べて日本の IAUD アワードはどのように感じていますか。

両方の賞に言える事なのですが、どちらも自国の企業の受賞が多い、参加者が多い傾向が強いです。(一部、日本・ドイツ以外の国の参加もあります)

我々としては、ベストプラクティスを色々な所から学んでいきたいという事の観点から考えますと、自国以外の参加者の割合をどちらも増やしていく必要があると考えています。

私どもも IAUD アワードの応募者を増やしていきたいと考えているのですが、それがなかなか進んでいきません。

—ドイツでも応募者を増やすために何か試みている事があれば教えて下さい。

もちろん、我々も同じように取り組みをしているのですが、人を集め、実際に色々な商品を出してもらい、もしくはその審査員を招くとしてもやはり時間とお金がかかってしまうという事で、なかなか簡単には出来ません。

何をしても、やはり資金(お金)がつかってくる。

ですから、我々としてはもっとプロモーションをして、企業に対して「参加すれば会社の業績にどういったプラスのメリットがあるのか」という事をしっかり宣伝していく活動が必要だと思えます。



バーデ氏(写真左)と北村氏

—今後、日本における UD の取り組みや、IAUD という組織に何かご期待されるような事がありましたら教えていただけますか。

できれば日本、あるいは IAUD の方からヨーロッパに対して情報の提示・展開をして頂けると非常にありがたい、と考えています。

UD に関してこれだけ多くの会社を招致できるような素晴らしい結束力をお持ちですので、皆さんが持っている考え方や戦略をヨーロッパに対してもっと提示してほしい。

もし可能であれば、ヨーロッパに来ていただいて、今回のような形でのセッションを行い、ヨーロッパのパートナーに対してオープンに会を持っていただけたら、という風に考えています。

—海外に向けての情報発信なども、これから頑張っけてやっていきたいと思ひます。

また、2020 年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されますけど、2020 年に向けて日本の UD に対しての取り組みや現在の状況で、「もっとこうした方がいい」というようなアドバイスがありましたら、教えて下さい。

実際にオリンピックが行われる前に、オリンピックに参加する予定の国の方々・それから障害を持った方々に日本に来ていただき、日本の UD をまず見てもらう。

その中で、「東京ならびに日本として、どうすればよりこれから 2020 年に来られる方達にオープンな環境を提供できるのか」という意見をもらう事が大事なのではないか、と思ひます。

—実際にそういった方に来て頂いて、実際に見て感じていただき、そしてご提案いただくのが重要という事ですね。

そうです。実際に来られた方々が体験した事を自国に戻って報告する。「日本のここは良かった」とか、色々な発見を報告する事になると思ひますので、それを組み合わせる事でさらに改良・改善できるのではないか、と思ひています。

—ありがとうございました。(了)

**トーマス・バーデ氏略歴:**

2016 年 7 月にバウハウス大学と共同でミュンヘンに「IUD - Institut für Universal Design KG (ユニヴァーサルデザイン研究所)」を創立、代表を務める。

ヴァイマル・ユニヴァーサルデザイン宣言の署名者。ミュンヘン工科大学で工業デザインの講師。2016 年より「IAUD アワード」審査員。

ソーシャルデザインと社会的起業家精神を UD の鍵となる要素であるとみなしており、10 年にわたり、ビジネスや学問、社会における UD の確立を達成するために献身してきた。

※トーマス・バーデ氏のインタビューは以下のサイトでも閲覧できます。

<https://www.iaud.net/network/8827/>

---

## オリンピックとパラリンピックの初の統合を日本で

パドミニ・トラット・バララム(ヴィスバ・バラティ大学デザイン教授、インド)

シンガナパリ・バララム(DJ デザインアカデミー学長、インド)



パドミニ・トラット・バララム氏(写真左)と  
シンガナパリ・バララム氏

—パドミニさんは、もう日本へは留学で2回、都合2年間お住まいになられているとお聞きしていますが、そのときの日本の印象はどうでしたか。

パドミニ: 私は1992年に初めて来日して富山で工芸のワークショップに参加、ワークショップの後は日本を旅行し1か月間日本の藍を見て回りました。

1995年から96年には「日本の藍とその利用—インドとの比較調査」という研究で、日本財団のフェローシップを得ました。その時は日本民藝館に所属し、その間東京、沖縄、徳島、奈良に滞在しています。

2000年にはインドのイカット(絣織)について講演するため講師として招かれ、インドのイカットの織り手とパトラ(インドのグジャラート州の絣織)の手織り機と一緒に来日し、沖縄の南風原文化センターの「アジア絣(イカット)ロードまつり」で、パトラの機織りの実演を企画しました。

そして2006年に再び日本に参りました。大阪の茨木市に住み、日本財団から国際交流に関する支援を得て、「インドから日本への織物の道と日本の織物への影響」という研究をしました。

その時は国立民族博物館(民博)に客員研究員として所属し、IAUDが京都で開催した「第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2006in 京都」に出席しました。

日本には大変良い印象を持っています。私にとって第二の故郷のような所です。他の国ではこんな気持ちは抱きません。

日本人はとても優しく親切です。それにどこへ行くにも便利ですね。迷うことは一切ありません。鉄道の駅とバス停にはとても優れた標識のシステムがあり、電車もバスも時間通りに動いています。

誰かに道を尋ねると、教えてくれるだけでなく、私が迷うかもしれないと思えば一緒に付いてきてくれることもあるのですよ!

日本の友人たちは家に招いてくれたのみならず、家に泊まるよう誘ってくれることもありました。それで日本の文化への理解を少し深めることができました。

ですから日本にはとても良い印象を抱いています。インドやそれ以外の国にいるときも、日本人を見かけると日本語で話しかけます。

現在はノーベル賞受賞者のラビンドラナート・タゴールが設立したヴィスバ・バラティ大学(インド・ベンガル地方内陸部シャンティニケタン)で働いています。

彼はちょうど100年前に日本を訪れているのです! タゴールはこの大学に日本語学科を開設し、日本から先生を連れてきました。

日本語学科のおかげで私は自分の大学でたくさんの日本人に会い、日本の会議にも出席しています。日本人の友人がたくさんいて、インドにやって来る人もいます。

―フィールドサーヴェイで日本全国を回られているとお聞きしていますが、そういう時に UD の面で困った事や感心した事がありますか。

パドミニ: はい、たくさんありました。例えば日本の交通信号は視覚に障害のある人向けに音を出しますよね。この音は青信号と赤信号とで異なり、目の見えない人にも健常者にも役立つため実に感心します。

音は横断歩道にたどり着く前から聞こえます。歩道の真ん中には点字ブロックも配置され、視覚障害者が真っ直ぐ歩けるよう導き、歩道が終わるあたりには3つのブロックを水平に置いてそれを知らせています。

点字ブロックがあると、車椅子が歩道の片側寄りを通る場合は進むのが難しいかもしれません。そのため車椅子を利用する人にとって不便にならないよう、点字ブロックは歩道のちょうど真ん中に配置され、歩道の点字ブロックの両脇にある平らなタイルに車輪が触れるようになっています。

このような UD の思考と実践にはとても感銘を受けます。

ただこの黄色の点字ブロックは、一般の人にとっては旅行の際に地下鉄の駅やバス停まで車輪付きの荷物を引いていくときに厄介です。点字ブロックによって車輪がスムーズに回りにくくなりますからね。



パドミニ氏(写真左)と北村所長

―日本で感じられた UD に関する面と、インドでの UD の考え方・普及の具合を教えてください。

パドミニ: 日本では UD が非常に進んでいます。会議やワークショップが開催され、学生にも UD が教えられています。

インドではバララムさんが2005年に初めてDJデザインアカデミーで通常の必修コースとして UD を導入しました。これがインドにおける UD 教育の始まりです。

2011年にはバララムさんはインドの思考力のあるデザイナー数人と、インドの状況に合った「インド UD 原則(UDIP)」という重要な文書を作成しました。

またDJデザインアカデミー(インド南部タミル・ナードゥ州コインバードル)の学長として、2015年3月にブリティッシュカウンシルと共同でインド初の UD 会議を開催しています。

会議の最後に行った宣言はインド政府に送られ、今始まろうとしている「Sugamya Bharat Abhiyan」(アクセシブルインドキャンペーン)に役立ちました。

これは政府が「UD 原則」を用い、選ばれたインドの50都市で公共の建物を障害者にとってアクセシブルなものにすることを目指すというものです。

このような努力に対して2015年、DJデザインアカデミーにはIAUDからUD教育分野で大賞が贈られました。

それから彼はインド国立デザイン大学院(NID)、ナーシクの建築大学デザインセンターなどでも UD のワークショップを実施し、講座を持っています。

2016年にはNIDで実施したUD選択科目で、UD対応の鉄道駅の例として、UDの原則を基にバンガロール駅のデザインについて学生に教え、指導しました。

日本ではさまざまな分野の多数の企業が協力して事業を行います、インドではそのような事業慣行は実施されていませんでした。

**シンガナパリ・バララム**：インドでは UD の教育は始まったばかりです。国は公共建築に UD を導入するため 50 の都市を指定しました。

これらの都市は UD を包括的に実現することを目的に、選ばれたインドの歴史的記念物でアクセシビリティの推進活動を始めたところです。

また、鉄道の駅に UD を導入するプロジェクトもあります。インドでは電車による移動が一番安上がりで、乗客と列車の数は世界最大です。ですから、私たちインドのデザイナーは電車と駅のプラットフォームに関するアクセシビリティに取り組んでいます。



インドの UD 先駆者シンガナパリ・バララム氏

それからデザイン学校で実施してきたワークショップと研究に基づいて国に提案も行っていますが、すべての提案が実現しているわけではありません。今後は国と協力して実現段階に移行していくでしょう。

電車には障害を持つ人用に割り当てられたコンパートメントを備えたものがありますが、このコンパートメントは実際にはまったく使われていません。

というのも、列車とプラットフォームの間が非常に広く、車椅子の利用者は言うまでもなく、特に視覚障害者や高齢者、妊婦が落ちる可能性があるのです。

電車の床とプラットフォームの高さも違います。ですから車椅子の人は電車に乗り降りできないと言います。

日本では車椅子の人が電車に乗るのを車掌さんが手伝っていますが、インドではないことです。

おまけに、車椅子の人は家族が付き添っていない場合しかこの特別に割り当てられた（特別にデザインはされていません）コンパートメントに乗ることが認められておらず、それでは結局実際の役に立ちません。

障害者専用のコンパートメントは、必然的に鉄道会社の職員が占拠しています。誰かが理由を尋ねると、障害者が誰も使っていないから使っているのだという答えが返ってきます（笑）。

#### —「第 6 回国際 UD 会議 2016in 名古屋」の展示会をご覧になりましたか。

**パドミニ**：今日の会議で私は論文発表と講演（セッション 4「産業振興の UD2～地域産業における製品と市場の見直し」）、バララムさんは講演（セッション 1「観光の UD1～世界の観光都市からの報告」）があったため、展示会を全部見る時間はありませんでしたが、昨日は半分見ました。残りは明日見ると思います。

それでも良い製品をたくさん見つけました。パナソニックのブースと積水ハウスのブース、車椅子利用者のための更衣室をくまなく、それからたくさんの小型の製品を見ました。

展示会の開催は良い活動ですね。実際の製品を見れば機能と仕組みを理解しやすくなります。セッションにも素晴らしいものがありました。セッションは講演者によって非常に違っていました。

—セッションの方も、色々もっと良くなるように私どもも努力していきたいと思えます。

**シンガナパリ・パララム**: 展示会で個人的に感心したのは、会場に展示されていた 100 パーセント竹のナプキンです。小さいながら質の高いものでした。

また、特に気に入ったのは積水ハウスの調節可能なトイレで、利用者の身長に合わせて高さを変更できます。車椅子の人に合わせて低くすることもできるでしょう。

このように特殊な機能を備えた製品が多数展示されており、非常に感心しています。それから高さを調節でき、体に障害がある人にもそうでない人にも適したテーブルと椅子を見つけました。

—2020 年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されますが、それに向けて何かアドバイスや UD の面でこうした方がいい、というようなご意見とかあれば教えていただけますか。

**シンガナパリ・パララム**: 私はパラリンピックとオリンピックを別々に組織するよりむしろ、視覚に障害がある人となない人、車椅子の人とそうでない人が一緒に参加できるオリンピックを見るのができたらと思っています。

しかし 2020 年のオリンピックとパラリンピックに向けて何ができるかということになると、2 つの従来別々だったイベントをひとつに統合するのが理想的です。

そのように大会を統合することで、障害者と健常者に真の喜びをもたらし、社会の真の統合という UD を促進できるというのが私の考えです。

障害のない人と障害のある人が一緒に競技すれば、その中で一体感が生まれます。例えば健常者からのサポートがあれば、手のない人も食事をするのができ、視覚障害者もどこへでも旅行することができます。

サポートがなければ障害者がすべて自分たちではできないことでも成し遂げられます。食事と旅行の両方に当てはまることは、スポーツにも当てはまるかもしれません。

私の意見ではこれは非常に重要です。インドではいくつかのヴォランティア団体がこういったことを試しており、とてもうまくいっています。障害者と健常者の両方が互いに楽しめます。私が思うに、これこそが本当の UD です。

実際、すべての選手(健常者も障害者も)が同じレベルで競い、判定基準が同じであれば、公平にならないかもしれません。ですから必然的に評価と判定の基準を変更して公平にする必要があるでしょう。

多くの賞を受賞したインド映画「ラガーン」には、インドチームとイギリスチームがクリケットの試合をするシーンがあります。インドチームのメンバーの 1 人には障害があり、腕をしっかり上げることができません。チームはこの障害を持つ人物を健常者にとっては難しいスピナーの達人として活かし、この短所をうまく長所に変えました。それがインドチームを敵の強豪チームに対する勝利に導いたのです。この例のように多くの障害は必ずしも欠点ではなく、潜在的な利点かもしれません。

もうひとつの例は電話交換手の仕事です。視覚に障害のある人は集中力が高いため、視覚に障害がない人よりも良いサービスを提供できる可能性があります。

これが視覚障害者自身とそのより豊かな能力への認識を高め、自信が強まり、同時にサービスの質の向上にもつながります。特に聴覚(音源)に関する事柄は視覚障害者が優位に立ちます。ですから、妨げと思われることが仕事に良い貢献をする可能性がある、という思考を人々に促すことが必要です。

2020 年、健常者のオリンピックと障害者のパラリンピックの統合が初めて日本で実現すれば素晴らしいですね。

—本日は、貴重な時間を頂き、ありがとうございました。(了)

### パドミニ・トラット・バララム氏略歴:

イヴィスバ・パラティ大学教授。元 DJ デザインアカデミー教授、元ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン(NID)、CEPT 大学客員教授、元ナショナル・インスティテュート・オブ・ファッション・テクノロジー(NIFT)客員教授。

教鞭をとりながら中国、韓国、日本、タイ、ブータン、ウズベキスタンで研究を行う。また、映画の衣装デザイン、本や記事の執筆、ワークショップの開催、アジアや米国の大学や博物館での講演を行う。

### シンガナパリ・バララム氏略歴:

DJ デザインアカデミー学長。インドの CEPT 大学名誉教授。前インド国立デザイン研究所教育部門長。

インドでデザイン教育のパイオニアであるデザイン講師グループの一人。同氏のデザインは評価が高く製品化されたものも多く、自らの名義の特許も 4 件取得している。

2001 年、障害者のための研究・貢献が評価されたヘレン・ケラー賞受賞。2004 年、インド人で唯一のロン・メイス賞受賞。米国の権威ある機関紙「Design Issues」名誉顧問

※両氏のインタビューは以下のサイトでも閲覧できます。

<https://www.iaud.net/network/8834/>



## これからの日本の住宅を考えよう

住宅学生コンペ『UD プラスの家～「ゼロからつくる日本の住まい」を考える～』開催

誰もが心豊かに暮らせる住空間づくりを目標に、「UD プラス」の考えを推進している住空間プロジェクトは、学生の皆さんにフレッシュで斬新な住まいと暮らし方の提案を募る住宅学生コンペ『UD プラスの家～「ゼロからつくる日本の住まい」を考える～』を開催します。

UD プラスの趣旨に沿っていることを前提に審査し、グランプリには賞金 5 万円が授与されません。

応募締め切りは 10 月 2 日(月)です。皆様の応募をお待ちしております。

※詳細は以下のリンクを御参照ください。

<https://www.iaud.net/activity/9039/>



東京開催！オリンピック・パラリンピックのヴォランティアにも役立つ「第 16 回 UD 検定初級」「第 10 回 UD 検定中級」開催のご案内

### 第 16 回 UD 検定・初級 講習会 & 検定試験

日時: 9 月 2 日(土) 9:00~12:00

会場: 芝浦工業大学芝浦キャンパス(東京・芝浦)

講師: 古瀬 敏氏(静岡文化芸術大学名誉教授)

試験方式: 講習会(2 時間)と UD 検定・初級試験(1 時間・50 問)のセット形式。合格後に「UD 検定・初級 認定証」を発行します。名刺への記載も可能です。

※詳細は以下のリンクを御参照ください。

[https://www.iaud.net/ud\\_certification/8864/](https://www.iaud.net/ud_certification/8864/)

## 第 10 回 UD 検定・中級 検定試験

日時: 9 月 2 日(土) 9:30~11:30

会場: 芝浦工業大学芝浦キャンパス(東京・芝浦)

試験方式: 2 時間・140 問ペーパーテスト。問題は公式テキストブックに準拠して出題します。  
合格後に「UD 検定・中級 認定証」を発行します。名刺への記載も可能です。

※詳細は以下のリンクを御参照ください。

[https://www.iaud.net/ud\\_certification/8871](https://www.iaud.net/ud_certification/8871)



第 14 回初級検定の様子  
(名古屋国際会議場)



## 2017 年 8 月の予定

月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3	4 13:00~ 移動空間 PJ @CUDO	5	6
7 15:00~ 臨時理事会 @IAUD サロン	8 15:00~ 情報交流センター @IAUD サロン	9	10	11 山の日 事務局・サロン 夏季休業 ←	12	13
14	15	16	17	18	19	20
→						
21 14:00~ 衣の UDPJ @IAUD サロン	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31 第 12 回 48 時間デ ザインマラソン in 東京 ←	→		
@芝浦工業大学						

### 無断転載禁止

次号は 2017 年 9 月発行予定

特集: 標準化研究 WG「子ども UD 授業」実施報告 / ワークスタイル PJ 上半期活動報告ほか

IAUD 情報交流センター(IAUD サロン):

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9 トヨタ八丁堀ビル 4 階  
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847 e-mail: [info@iaud.net](mailto:info@iaud.net)